

大正二年七月三十日

東京市牛込區天神町二十三番地

白人社 田山 停

雲



白雲大隈重信閣下

謹啓

先般仰蒙申上承拙著「五史」御文ヲ俄々申上
に甚き吉田東伍先生と煩中別紙ノ角了出
来矣河仰高覧に供一交柄七日頃申発書
仰宜之文河不都合の真何卒竹朱正被
下度伏し奉願上矣 敬具

序

我國の歴史は、文字の傳來を支那に承けしに由り、多くは支那思想に拘束せらるゝ所あり、而も彼の上古未だ支那思想の輸入せられざりし質朴の時代には、眞の歴史といふべきものなく、僅に古事の物語あるのみ。物語とは、語部といふ専門家すらありて、聽衆に



序

我國の歴史は、文字の傳來を支那に承けしに由り、多くは支那思想に拘束せらるゝ所あり、而も彼の上古、未だ支那思想の輸入せられざりし質朴の時代には、眞の歴史といふべきものなく、僅に古事フルゴトの物語モノガタリあるのみ。物語とは、語部カゴといふ専門家すらありて、聽衆に面白く感受せしむるを目的とす。故に多少の事實は曲ぐるとも、老弱男女の聽く耳に面白く感せしむるに力むるの結果、或は誇張の詞を用ひ、或は譬喩の例を假り、又調律リキムをも整へたるが如し。神

1

代の卷、はた古事記、その他の奈良朝に記録せられし史類には、此物語多し。此物語は後世人の眼には、或は荒唐の談として斥けらるるも、實は古人の眞面目の遺物なり。其漢學者に喜ばれざるも、實は支那思想に拘束せられざればなり。たとへば、古事記と日本紀の如き、共に尊重すべき古典なりと雖、後世學者の之を讀むに、自分の立場よりして、遂に好惡取捨を免れざる、皆是なり。但し、日本中の文明をば、外來の輸入に假る者として之を論ずれば、佛教並びに支那思想を以て第一と爲す。此に於いてか、日本中世の文學、藝術のあらゆる者に、一種の變化を起し、引いて近世と爲りては、儒佛

2

の對抗に止まらず、和學の反動起り、洋學の波動生じ、歴史といふものも、之を古代の神話や物語と選を異にすることゝなりぬ。殊に輓近、西洋史學の研究法の入り來るありて、今や純然たる科學の世となりぬ。

3
さりながら國民教育の上より見れば、亦多少の説あり。歴史は必ずしも、今日の科學風の取扱を可とするにあらず。昔の物語風を殘しおきて、童蒙訓育の乘となすも、亦可なりとす。謂はゆる大人の學と、訓蒙の書は、自ら別の所あり。況んや、科學の研究は、その材料の集め方、場面の廣さ、論議の斷案に、幾多の未完、未決の點あり。

4
史學の運命は、猶之を未來の大天才に待つ所あり、歴史、豈容易ならんや。

吾が早稻田大學校友、田山停雲が著すところ「國史」は、其意、一般國民に歴史の知識を普及せしむるに、まづ興味を以て之を讀ましむるを急務とすといふに在り。即ち、着筆行文も一に此用意に出づといふ、是亦余が持論に合へり。今其印刷の成るに當り、一言以て之に弁せむと請はるゝに因り、應ふるに此説を以てすと云ふのみ。

伯爵 大隈重信

神奉り果國社津

伯爵大隈重信閣下



の對抗に止まらず、和學の反動起り、洋學の波動生じ、歴史といふものも、之を古代の神話や物語と選を異にすることゝなりぬ。殊に、最近、西洋史學の研究法の入り來るありて、今や純然たる科學の世となりぬ。

3
さりながら國民教育の上より見れば、亦多少の説あり。歴史は必ずしも、今日の科學風の取扱を可とするにあらず。昔の物語風を残しおきて、童蒙訓育の栗となすも、亦可なりとす。謂はゆる大人の學と、訓蒙の書は、自ら別の所あり。況んや、科學の研究は、その材料の集め方、場面之の廣さ、論議の斷案に、幾多の未完、未決の點あり。

4
史學の運命は、猶之を未來の大天才に待つ所あり、歴史、豈容易ならんや。

吾が早稻田大學校友田山停雲が著すところ「國史」は、其意、一般國民に歴史の知識を普及せしむるに、まづ興味を以て之を讀ましむるを急務とすといふに在り。即ち、着筆行文も一に此用意に出づといふ、是亦余が持論に合へり。今其印刷の成るに當り、一言以て之に弁せむと請はるゝに因り、應ふるに此説を以てすと云ふのみ。

伯爵 大隈重信

神奈川縣國村津

伯爵大隈重信閣下

侍史



東京市牛込區天竺町二十三番地

白 人

